

三芳野神社社殿に関する研究

建設工学専攻
建築史研究

me15053 荘司 柚太
指導教員 伊藤 洋子

01 | 研究背景

三芳野神社(写真1)は、慶安2年(1649)松平伊豆守信綱が奉納した「三芳野天神縁起絵巻」(図1)によると、平城天皇大同年間(806~810)の創立とされている。

現社殿は、本殿・幣殿・拝殿よりなる権現造の複合社殿で、寛永元年(1624)に造営され、明暦2年(1656)に改修を受けている。しかしこれに先立つ慶安2年(1649)の「三芳野天神縁起絵巻」には、幣殿はなく、本殿と拝殿はそれぞれ独立している。幣殿はこの絵巻の成立以降に増築されたものと考えられており、更に本殿が現状の入母屋ではなく、流造として描かれていることから、本殿も改変を受けていることが推測される。明暦2年の改修時に、元和8年(1622)に造営された江戸城二の丸東照宮の拝殿及び幣殿が、三芳野神社の外宮として当地に移設されたと言われており、また現在の三芳野神社の本殿は、江戸城二の丸東照宮の本殿を移築したものという説があることから、この改修時に本殿が改変を受け、幣殿が増築された可能性が考えられる。

02 | 研究目的

山田勝利「三芳野神社社殿の一考察」では、寛永元年と現社殿を比較し、現社殿に対する疑問点を挙げている。また「明暦二年別当常海覚書」での江戸御城内御殿との記述や仙波東照宮の昭和37年の半解体修理工事において、二の丸東照宮空宮説が否定された事を受け、三芳野神社本殿に関する仮説を立て考察を行っているが、移築した記録は残っておらず証拠はない。

本研究では、三芳野神社社殿の変遷調査、及び放射性炭素年代測定法を用いて、江戸城二の丸東照宮との関連性について考察を行う。



図1「三芳野天神縁起絵巻」第9図 慶安2年(1649)

03 | 三芳野神社

03-01 | 社殿の変遷

●寛永元年(1624)

三芳野神社社殿が造営(再建)される。この時の拝殿が現在に残る拝殿であると考えられている。また「三芳野天神縁起」第9図より、当時は本殿と拝殿のみで、幣殿はなかったと考えられている。

●明暦2年(1656)

社殿の大修理が行われ、その際に本殿は撤去され、江戸城二の丸東照宮の本殿を移設、幣殿を増設し権現造に改修したと考えられている(図2)。中備に臺股を新設しており、現在の臺股はこの時のものである。外宮として田曲輪に江戸城二の丸東照宮拝殿・幣殿を移設している。(現川越氷川神社境内社八坂神社)



写真1 三芳野神社

図2 三芳野天神絵図

04 | 放射性炭素年代測定

04-01 | 放射性炭素年代測定法の原理

地球自然の生物圏内では、 ^{12}C や ^{13}C 、 ^{14}C の存在比率は、ほぼ一定であり、動植物内部における ^{14}C の存在比率は死ぬまで変わらない。 ^{12}C や ^{13}C は動植物が生命活動を停止した後も体内にある炭素量は不変であるのに対して、放射性炭素である ^{14}C は、死後は新しい炭素が補給されなくなるため、 β 線という放射線を出しながら規則正しく壊れていく性質を持っている。また、 ^{14}C の半減期が5730年であることから測定が可能となる。

04-02 | 三芳野神社年代測定試料

調査・資料採取日: 2016年7月5日(火)

採取試料箇所: 床下柱(本殿・幣殿・拝殿)、梁(拝殿)

採取箇所の選定については、後世の補修がされていないと思われる試料が選出され、ほぞ穴から鑿を用いて中心部に近い位置までの柱目板(厚さ0.5~1cm程)を床下で採取した。桁材は、端の木口面から鋸を用いて1cm程切断して試料を採取した。

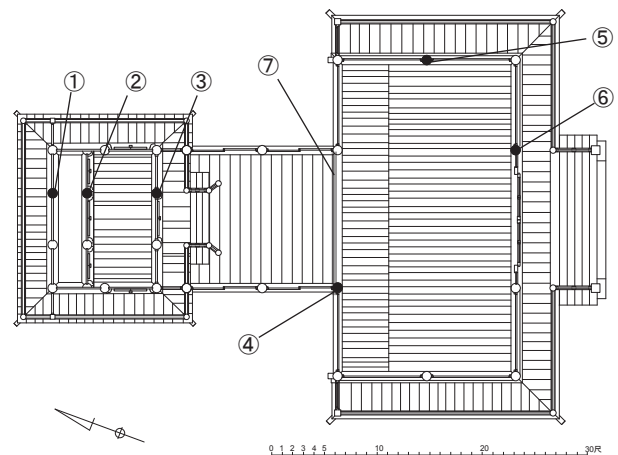


図3 三芳野神社測定部材位置図

04-03 | 解析結果

①本殿「ハ」柱

柱に「ハ」と墨書で書かれていた 95 年輪のヒノキ材、1-5 年輪試料、46-50 年輪試料、91-95 年輪試料の三点の測定を行い、ウィグルマッチ法を用いた解析で 1391-1415 年と得られた。

②本殿「ハ」柱の南の柱

50 年輪のヒノキ材で、1-5 年輪試料、21-25 年輪試料、46-50 年輪試料の三点の測定を行い、ウィグルマッチ法を用いた解析で 1490-1537 年と得られた。

③本殿「と七」柱

柱に「と七」と墨書で書かれていた 75 年輪のヒノキ材、1-5 年輪試料、36-40 年輪試料、71-75 年輪試料の三点の測定を行い、ウィグルマッチ法より 1737-1772 年が 70.5%、1793-1803 年が 4.8%、1937-1954 年が 20.1% と得られた。伐採年は 18 世紀中期以降と推定され、弘化 4 年の大修理に使用されたと考えられる。

④幣殿・拝殿境の柱

70 年輪のヒノキ材、1-5 年輪試料、36-40 年輪試料、66-70 年輪試料の三点の測定を行い、ウィグルマッチ法より 1733-1748 年が 59.9%、1792-1800 年が 35.5% と得られた。伐採年は 18 世紀中期以降と推定。③と同時期の可能性が高く、弘化 4 年大修理に使用と考えられる。

⑤拝殿東面中央の柱

80 年輪のヒノキ材、1-5 年輪試料、36-40 年輪試料、76-80 年輪試料の三点の測定を行い、ウィグルマッチ法を用いた解析で 1472-1537 年と得られた。

⑥拝殿正面中央の柱

50 年輪のヒノキ材、外側 2 年輪を測定試料として採取、解析より 1296-1400 年と得られた。

⑦幣殿・拝殿境の中央桁

55 年輪のヒノキ材、1-5 年輪試料、26-30 年輪試料、51-55 年輪試料の三点の測定を行い、ウィグルマッチ法より 1770-1783 年が 12.4%、1788-1814 年が 83.0% と得られた。伐採年は 18 世紀後期から 19 世紀初めの伐採と推定され、弘化大修理に使用されたと考えられる。

04-04 | 考察

木材は最終形成年輪部分を測定すると伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると内側であるほど古い年代が得られる。今回の試料は全て最終形成年輪が現存していないため、現存している最終年輪のさらに外側にも年輪が存在していたはずである。したがって、測定結果は木材が伐採された年代よりも古い年代を示している可能性がある。以上、放射性炭素年代測定法による 7 点の部材の年代測定の解析結果を整理・考察をする。

③本殿「と七」柱と④幣殿・拝殿境の柱及び⑦幣殿・拝殿境の中央桁の 3 点の部材は比較的年代が近接しており、同時期の伐採である可能性が高いため、弘化 4 年

の大修理で使用された部材であると思われる。

②本殿「ハ」柱の南の柱の最外層は 1490-1537 年、⑤拝殿東面中央の柱は 1472-1537 年という結果が得られた。この 2 点は年代も近いことから同時期に伐採された部材である可能性が高い。しかし寛永元年の造営や元和 8 年の造営と比べても 90 年以上古い年代を示した。木材試料は八角柱状に加工されたケヤキ材である。表面にあった辺材部分が失われており、それぞれ伐採年よりも内側の年輪層が測定されているものの、その年輪数は 20 年輪より大きく削られているとは考えにくい。寛永元年、元和 8 年どちらの造営に使用されたか年代を絞り込むことは難しい。よって、より古い時期の建築物から転用された可能性も考えられる。

また①本殿「ハ」柱は 1391-1415 年、⑥拝殿正面中央の柱は 1296-1400 年という結果より、測定された年代は寛永・元和の造営より 200 年以上古い数値が出た。これより転用材の可能性が高いと考えられる。最も可能性が高いものとしては、太田道真・道灌らの川越城築城の際に社殿の修復が行われ、使用された材ではないだろうか。川越城築城年代である長禄元年（1457）と年代も近い。すなわち、川越城の鎮守社として整備された柱が、寛永元年の造営の際に転用材として使用され、現社殿に現存すると推察できる。しかしながら、寛永元年の造営以前の十分な史料がないことから、柱の転用されていく経緯を追うことは不可能である。

これらの考察を元に江戸城二の丸東照宮空宮移築と照らし合わせて考えると、三芳野神社本殿が二の丸東照宮本殿である可能性は低いと推測される。今回の年代測定で選出された柱材は、後世の補修がされていないと思われる試料であり、少なくとも弘化の修理材ではないと推測される①と②の材は、近い年代を指し示すはざである。そうでないとすれば、異なる年代に伐採されたことを意味し、上記の転用の考え方が最も妥当であろう。従って二の丸東照宮本殿の移築ではない可能性が高いと考えられる。

05 | 総括

放射性炭素年代測定を利用し江戸城二の丸東照宮との関連性について考察を行ったが、寛永元年造営の三芳野神社本殿と元和 8 年造営の二の丸東照宮との年代が近接しており判断が難しい。そのため川越氷川神社にある二の丸東照宮の幣殿・拝殿を移築したと言われる八坂神社との比較考察が必要であり、今後の展望として挙げられる。

参考文献

- 1) 『三芳野神社社殿修理工事報告書』三芳野神社社殿修理委員会 1994
- 2) 「三芳野神社の社宝 展示図録」川越市立博物館 1993
- 3) 「江戸図屏風別巻 江戸の都市と建設」毎日新聞社 田辺泰著 1972
- 4) 「三芳野神社社殿の一考察」川越の文化財第 45 号 山田勝利著 1990
- 5) 『埼玉県の神社 入間 北埼玉 秩父』埼玉県神社庁 1996
- 6) 『江戸・関東の城下町』平凡社 1988
- 7) 『法隆寺を支えた木』西岡常一 小原二郎著 日本放送出版協会 1978